

続・天使のつぶやき

ある時 天使はつぶやきました。



「僕はどうしてここにいるんだろう？」

「おかえり…、今度はどうだった？」

神様が問いかけました。

「今度…？ 今度って？」



「さっきまでまた、もうひとつの世界、に行っていたんだよ。覚えてないかい？」

「……うーん」

天使は少しづつ思い出ししてきました。

「人を……たくさん愛することができた。

家族もできたよ。

嬉しいことも楽しいこともたくさんあった。

でも辛いこともいっぱいあったな……」



「どんなことが嬉しかった？」

「どんなことが楽しかった？」

「うん、好きな人と……」

大好きな人と一緒に暮らせて子供も生まれた。

大変だったけど、家族と過ごす時はとても幸せだったよ。

でも……」

「どうも。」

「思っていたような生き方はできなかったな…」

「どんな生き方ができなかった？」

「みんながいつも笑顔でいられる世界にしたかった。」



「どんな風に？」

「皆、ひとりひとりが生まれて来た意味をきちんと理解して

自分自身のありのままの人生を受け入れて、

変えていきたいところは意志を示し

苦しくて辛い時でも励まし合って助け合って、

困難をも楽しんで笑って過ごせ…

誰もが、最後まで幸せを感じながら終わることの出来る…。

そんな生き方を皆に伝えたかった…。」

「伝わらなかった？」



「同意してくれる人もいたけど、ほとんどの人が興味ないって…」

「理想と現実とは違う。そんなこと言っていて食べていけるのかい？」ってね。」

「ねえ、神様…」

「苦しみや悲しみ、恨みや憎しみは最小限の体現でいいよね？」

「そうだね…」

「じゃあ、どうして…」

「人はすぐにそんな感情を募らせて

自分自身の人生を難しいものにしてしまうんだろう？」

「皆で協力していけば

最小限で済ますことができるのに…」



「それを望む者もいるからじゃないかな？」

簡単には乗り越えられない困難に挑もうとする者が…

それに君自身が人生を理解していたとしても

それを楽しんでいなかったようだし…」

「…そうだったのかな？」



「嬉しさや楽しさや幸せは説くものじゃなくて…

自然と伝わっていくものだよ。」

「……………」

「もう一度、やり直してみるかい？」





「やり直す…？」



「覚えてないかもしれないけど、

私たちはこうやって何度も話し合ってきたんだよ。

『次はどうする？』ってね…」

「そうなの？でもまた最初から始めるのは…」

「やり直しはどこからでもできるよ。何度でもね。」

「…ううん。」



「理想となる君自身のイメージを作り上げて、その通り振る舞い続けなければならない。」

「それだけでいいの？」

「そう、そうすれば君を取り囲む世界が君の扱いを改め、そのように動き始めるから…」

「ただし、すぐに効果が出ないからと言って諦めてはいけませんよ。」

「それまでの流れを変えようとすればそれなりに時間はかかるからね。」

「どのくらい？」



「十年とか二十年とか五十年とか…」

「人生の最後にやっと叫ぶ者もいればその途中で終わってしまう者もいる。」

「…もっと手っ取り早い方法はないの？」

「いちばん効果的で効率のいい方法のヒントはいつも皆に送っているんだけどね。」

「残念ながらそれを受け取って活かせる者は…」

「そうなの…分からないな。」

「何気なく目に留るようにした看板や広告、

人と接した時の相手の対応、

あらゆる処にメッセージが込められているんだが…

どう受け止め、どう活かすか？それは君次第だよ。」

「そんなこといちいち思っていたら暮らせないよ。」



「そうだな…先ず、直感を信じればいい。」

「なんとなく、はやり直した後の君自身からのメッセージだから…」

「やり直した後の？」



「そう、別の方法を選んだ君からのメッセージだ。」

「向こうの世界には、僕以外の僕もいるってこと？」

「まあ、平たく言えばそう云うことだね。」

「僕は何人いるの？」

「無数にいるよ。」

ひとつの選択をすれば別の分岐ができる。

もうひとつの選択をすればまた更に分岐ができる。」

「じゃあ、その度に別世界ができて分岐はどんどん増えていくの？」

「いや、分岐がどんどん増えるんじゃないよ……うーん、

そうだな……霧の立ちこめた海面に木葉が浮かんでいると思つてごらん。

辺りはよく見えないし、葉は潮のチカラでどこかへ流されている。

その葉に乗っているのが君だ。」

「……うん。」



「その近くへ別の葉が現れて、君はそっちへ乗り移る。」

葉は似通っているが少し違っている。

それが選択によって分岐した別の世界だ。

乗り移った葉はやがてささきとは別の潮の流れに乗って違う方へ向かう。

辺りをよく観ると別の葉がたくさん浮かんでいることに気付く、

それぞれの葉は皆異なっていてそれぞれ別の方向へ動いていく…

中にはまた乗り移れる葉やそのまま何処か彼方へ行ってしまう葉もある。」



「分岐は増えるだけじゃないってこと？」

「そう、時間と呼ばれているものは連続した現象のように思われているけど、

実はこの断片的な葉を乗り換えることを繰り返して、その記憶を列ねているに過ぎない。」

「乗り移ったって分かるの？」

「向こうの世界では連の流れのように感じるだろうから分からないだろうけど、

稀に証が残ることもあるよ。」

「どんな？」

「既視感って…分かるかい？」

「一度も体験した」との無いことを既に経験したように錯覚する…？」



「そう…」



「他にも自分自身や周りの人たちにそれまでにならぬ違和感を感じたり、

持っていた物の色や形が記憶とは違っていたり…

ちよとした思ひ違ひなども含めると日常的に起つていくことが分かるだろうか？」

「…うん」



「いつも何かを『選択』して生き方を決めていくんだよ。」

「そんな風に考えると…何だか疲れちゃうね。」

「だから君もそんなことはあまり気にせず、もっと楽しんでいいんだよ。」

君が楽しんでいると皆も寄つて来るよ。」

嬉しさや楽しさは論ずるものではなく、自然に伝わってゆくものだから…」

「……そうか、もうと楽しんでいらんだ。」



「そうだよ。楽しまなきゃ……！」







「うん、僕もう」度やり直してみるよ。」

